

台湾スタートアップ・ベンチャー/ヒアリングレポート

Taipei Computer Association 東京事務所 駐日代表 吉村 章

■台湾スタートアップ・ベンチャー、3つの特徴

9月に台北、桃園、台中、台南など各地を回り、現地ヒアリングを実施。このレポートではそのヒアリング結果をもとに台湾スタートアップ・ベンチャーの特徴をまとめてみたい。また、レポートの後半では訪問した企業のサービスやソリューションについても紹介する。ヒアリングの対象企業は今年6月に行われたスタートアップ・イベントである InnoVEX (イノベックス) で注目を集めた企業から選んだ。特に、InnoVEX でアワードを受賞した企業、またはアワードの候補になった企業に注目し、最終的には日本とのビジネスに積極的な企業をヒアリング候補企業とした。

台湾スタートアップ・ベンチャーの特徴について、結論から述べるとポイントは次の3つの点にまとめられる。

第一に、台湾スタートアップ・ベンチャーはハードウェアに「強み」がある企業、またはハードウェアとの組み合わせで「強み」を発揮するサービスやソリューションを提供する企業が多い。そういう意味ではシリコンバレー発のベンチャーのように既存の慣習を打ち壊す破壊的イノベーションを起こすのではなく、これまで培ってきたモノづくりの「強み」と経験を活かしながら新しい分野に挑戦する企業が多い。

第二に、台湾のスタートアップ・ベンチャーが得意なのは「最先端技術」を駆使したビジネスモデルの構築ではなく、「実用先端的な技術」を活用したリバンドル型 (Rebundle)、アンバンドル型 (Anbundle) の企業である。台湾のスタートアップ

・イベントである InnoVEX (イノベックス) の出展企業も同様に最先端や高付加価値を競い合うのではなく、実用先端的な技術を活用したリーズナブルなコストでユーザーフレンドリーなサービスやソリューションを展開する企業が多かった。

第三に、多くのスタートアップ・ベンチャーは IPO (Initial Public Offering) を目指すのではなく、大手ベンダーとの協業により (またはその傘下に入ることで) 継続的な企業経営を目指し、腰を据えたモノづくりに取り組む企業が多い。同時に大手ベンダーが持っているネットワークを活用して、欧米を主力市場とした事業展開を目指す。特長はこのような点にまとめられる。

※ InnoVEX (イノベックス) とは 2016 年から Computex (コンピュテクス) に併設されたベンチャーイベント。詳しくは機関誌「交流」7月号 vol.928 をご覧いただきたい。



写真1 Computex は 2018 年 6 月 5 日 (火) から 9 日 (土) まで会期 5 日間、出展企業 1,602 社、5,015 小間、海外 168 の国と地域から 42,284 人のバイヤーを集めて開催



写真2 InnoVEX (イノベックス) は2016年からComputexに併設。6月6日(水)から3日間の会期で開催。今年には台湾と世界21の国と地域から388組の企業や団体が参加

■ 2015年が変化の節目になった年

2015年はさまざまな意味で業界の変化の節目になった年と言えるだろう。IoT (Internet of things) が業界で本格的に取り上げられるようになり、Computex (コンピュテクス) でもIoT関連の技術や製品が目立つようになった年でもある。従来、台湾大手ベンダーのビジネススタイルは、OEM/ODMなどで培ってきた量産技術を活かして、パソコンやタブレットなどハイテクIT端末を大量に生産し、欧米を中心としたグローバル市場に供給してきた。

しかし、社会のさまざま分野でIoTが本格化し、クラウドサービスが従来のビジネスモデルに変革をもたらし始めると台湾大手ベンダーのOEM/ODM中心のビジネスモデルにも陰りが見え始めた。大量にモノを作って売る時代ではなく、それぞれの分野に特化したソリューションが注目を集めるようになってきたからである。

今日、台湾ではSmart (智慧・・・) が重要なキーワードとなっている。Smart・・・の文字があちらこちらで眼に留まる。たとえば、Smart home (家電)、Smart office (オフィス)、Smart factory (工場)、Smart agri (農業)、Smart ve-

hicle (車両)、Smart health (健康)、Smart medical (医療)、Smart education (教育) など。何でもSmartを付けるのもどうかと思うが、Smartがひとつのトレンドになっている。IoTを使って各社とも新しいサービスやソリューションの開発にしのぎを削る。

イメージだけでなく、各社の製品も大きく様変わりした。Computexの出展製品を見てみると、特に大手ベンダーは従来のパソコンやタブレットなどIT端末中心の展示からそれぞれの特色を活かしたサービスやソリューションの展示が目立つようになってきた。



写真3 パソコン大手Benq (明基) は無人コンビニのシステムを出展。顔認証のゲートから店舗内の清算レジまでブース内に無人コンビニの買い物空間を設けてデモを行っていた

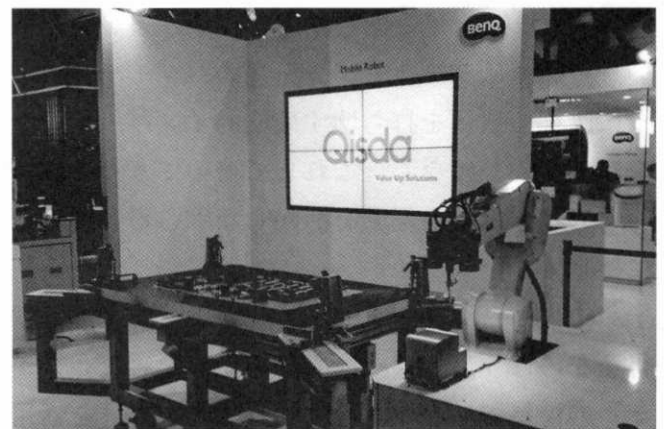


写真4 こちらもBenq (明基) ブース。ロボットアームを出展、スマート・ファクトリー分野にも積極的に取り組んでいる姿勢をアピール



写真5 MSI(微星)はスマート・ビーグル、テレマティスのソリューションを出展

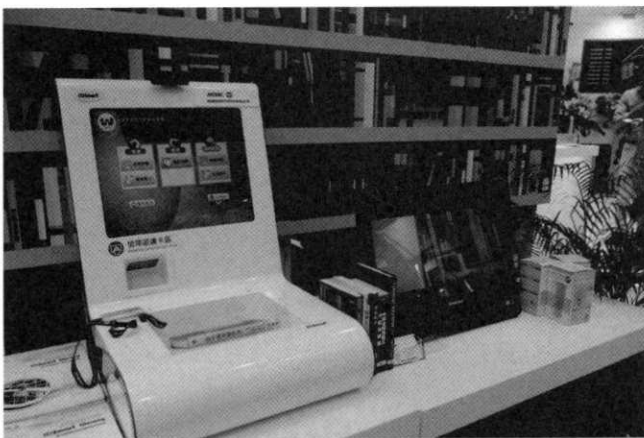


写真6 MiTAC(神通)は図書館システムのソリューションを出展

地でスタートアップ・ベンチャー育成の動きが本格的に広がりを見せている。

台湾でも2015年5月「台湾矽谷科技基金投資計画」(Taiwan Silicon Valley Science and Technology Fund investment Plan)を策定、2018年2月からは「優化新創事業投資環境行動方案」(スタートアップビジネス投資環境最適化に向けた行動方案)が進められるなど、その動きが本格化している。



写真7 ハードウェア・ベンチャーで注目を集めている中国/深セン

■注目を集めるスタートアップ・ベンチャー

IoTと時を同じくしてスタートアップ・ベンチャーが注目を集めるようになった。中国では2014年9月ダボス会議における李克強首相の提言をきっかけに本格的なスタートアップ・ベンチャーの支援が始まった。「生態圏」(エコシステム)がキーワード、各地に「創業園」(インキュベーション施設)が作られ、豊富な資金投下のもとでスタートアップ・ベンチャー育成が始まった。

2015年には「中国・中小企業青書2016」で経済発展の新たな推進力としてスタートアップ・ベンチャー支援が明文化され、同年アリババが創業者基金を本格な運用を開始。2016年には深センで「深圳湾科技生態園」に代表されるように中国各



写真8 InnoVEX2018のアリババ創業者基金ブース、InnoVEXでも存在感を示していた